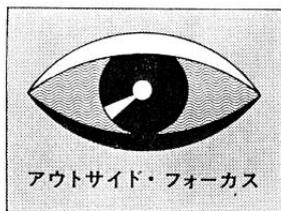


『マネジメント』1970年4月（日本能率協会）



情報と教育はどう違うか

教育と情報の類似点

情報化社会などという言葉がはやり出して、なんでもかんでも情報、情報といわれる。怪しげな情報が氾濫し出して、情報が公害をひきおこしつつある。人々は情報という名にあたかも魅せられたかのごとく、情報を求めているらしい。

ふと私は、情報を求める人々と、教育を求める人との相似を感じさせられた。求める人ばかりではない。情報売る人と、教育売る人との相似も。企業内教育も今は花ざかりであるらしい。企業めあてのセミナー屋さんと称する教育機関の活動も活発であるらしい。そこで売られているのは教育なのか、情報なのか。教育とは情報売る仕事をいうのではないか。こうなると、情報と教育とは相似であるなどということではないようだ。

情報が氾濫して、公害をひきおこしつつあるように、教育も氾濫して公害をひきおこしつつあるのではないか。不特定を対象にして情報が売られている限りは、それを買わなければよい。ところが企業の中へそれが食いこんでくると、企業内に働く人は、その情報を無理強いされる。企業の命令で教育を受けさせられる。そしてわけのわからぬ情報にがまんしてつきあっていないなくてはならぬ。

経営者はそれで人間を教育したつもりになっている。能力を開発したつもりになっている。しかし従業員にとっては、やりきれない思いをさせられるだけである。これが企業に雇われる辛さかとあきらめている。役に立たないことだとわかっている、みんな口をつぐんでいる。そういう状況がぼつぼつ見えはじめている。教育流行のそんな一面は、何か身の毛のよだつ思いをさせるものがある

大学の講義や高校の授業を思い出してみると、まさにそういう情報のおしつけ以外の何物でもなかつ

たような気がする。もちろん、求めて行ったのだから、我慢をするのが当たり前である。昔だから我慢をしていたのだろうが、現在だったら街に氾濫している情報やテレビ情報を受けとった方がましだと思ってやめていたかもしれない。

教育公害に発展する危険も

教育は単なる情報の授受ではない。そこには人間関係が大切であるなどと、体裁のよいことがいわれても、それは言葉にすぎない。現実には、いわゆる情報は紙に書かれたり、テレビの画面に出てきたりしているが、教育の場合には実際の人間の身体が何メートルか前にあるという違いでしかない。

その違いを微妙に感じるほどこちらの神経は発達していないから、あまり有難いと思わなかったのである。現代のゲバ学生ならずとも、そういう教育を教育、教育とあまり大げさに押しつけないでくれと怒鳴りたくなるのである。

教育が情報の伝達にすぎないのなら、それは印刷物でも、ラジオでもテレビでも、テープレコーダーでもよいではないか。1ヵ所に人を集めて何時間かを強制的に制約する必要はなさそうである。ひとりひとりの自主的な学習にまかせた方がよい。

もし、そこに教育する人と教育される人とがいて、どうしても対話しなければならぬのなら、そういう場だけをつくったらよい。なんでもかんでも人を集めてやるというのはおかしいことである。

産業公害というのも、それが小さい工場でどこかの片すみで存在するうちは、公害にはならなかった。教育公害も同様なのであろう。現代のように教育が、大きく動き出したら、その公害性が見えてきた。それをなくするには、根本的にやり方を転換しなくてはならない。それでなければ造反がおこるのである。

（矢口 新）